横芝の碑

（その七十四）

――領主側近への栄進を望まず――

郷土教育に生きた知久先生碑

北清水延命寺の門をくぐると、すぐ右側に高さ一メートル程の自然石型をした碑が建っています。

これは、幕末から明治維新にかけて、領主の用人として士分に取立てられながら、郷里青少年の教育のためにその職を辞退して帰郷し、郷土教育者としての名望高かった伊藤良右衛門知久先生のため、その教え子達が建てた報恩の碑なのです。

先生は、文政十二年に武射郡北清水村に生まれました。生来の利発さと能筆は神童と言われ、近所でも評判されていましたが、何時か領主の耳にも入り、若殿の学問相手として江戸の邸に招かれました。大きくなるにつれて先生の才能は冴えて益々領主の信用も加わって横目付、村方取締役等に取立てられ故郷に錦を飾りましたが、さらに万延二年には士分に取立てられ江戸邸用人に昇格したのです。郷里北清水の人々は我が事のようにこれを喜び、他の村々への自慢にもしていました。しかし、先生は自分の出世より、ともかく向上心に乏しい郷土の青少年の事が心にかかってならなかったのです。はつらつと行動発言する江戸市民の姿を見るにつけ、その想いが強くなるのでした。そして、再三の請願の末漸く許されて故郷に帰って来ましたが、先生の人物を惜しむ領主は再び横目付兼村方取締役に任命された一事でも先生に対する領主の信望が伺われます。

▲知久先生（写真右上）の徳を慕う人々によって建てられた報恩の碑

青少年の訓育に精進

郷土に戻られた先生は、暇を見ては近所の若者を集め、書道や江戸邸等で学び得た和漢の読解や礼法を教えたりしていましたが、次第に教えを乞う者が増えて来ました。そのうちに大政奉還等もあり、先生も横目付等の仕事からも開放されて来ましたので、乞われるままに我が家を講議所として家塾を開きました。既に先生の人格と博学を知る人々は袖を連ねてその門を叩き、一時は一日を三回に分けて講義をする程であったというこです。

やがて明治の学制発布となり、新島、北清水にも学校が建ちましたのでこの家塾も閉鎖され、先生も進んで小学校の先生として奉職、明治十八年に後進に途を譲って退職されるまでひたすら郷里青少年訓育に精進されましたが、明治二十八年、大勢の教え子達に惜しまれながら六十七年の生涯を閉じられたのですが、先生の徳を慕う人々は誰からともなく話が起こって建立されたのがこの報恩の碑なのです。

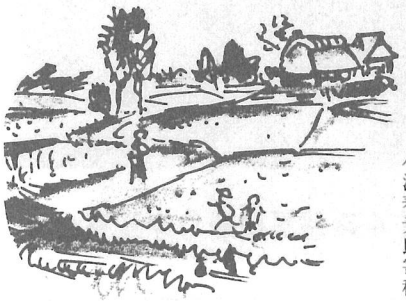
題額には、「知久翁墓碣銘」とあり、碑文には、「余為郷先生作墓文多矣大抵皆舊幕府之時以郷党長老以傍教育子弟者非若余之世学校教育専以訓導為職之比也蓋其為教不過読書把筆敬書長事老出入恭遜之節亦非有博聞多識之事然其子弟之間情意懇切與家人父子同終其身而不相営建具墓碑以報教育恩也夫人不忘師恩則亦必善事其父母兄長矣風俗如是何患不帰厚呼、知久翁教子弟蓋亦有然者也翁姓伊藤氏幼字良助後襲王父名称良右ヱ門知久其号南総武射郡上堺村北清水里人少而有于幹嘉永三年其地頭加藤君擢為横目付兼村方取締役万延二年二月召江戸邸為給人其三月進用人文久三年帰郷里復旧役維新之初開家塾蓋因自其父祖之時教育村里子弟也其訓人以礼法為先務明治九年為其村小学校教授十八年以衰老辞職令茲乙未三月十八日殉距生文政己丑亨年六十七葬于其郷川古野先塋次配早川氏生三男二女長男久良次継家長女某別家産業云於是其嘗受教育者八十余名乞余文喜其子弟之情厚也不辞而述之且係以銘曰古者学校訓子弟、以正風俗為其先移風化俗在礼法　斯翁所教蓋亦然

明治十九年一月上院

栗水並木正韶撰文幷書題額、」

と刻まれています。なお先生の後裔には良右ヱ門（りょうえむ）の家号で北清水の名家として栄え、また教育者の現存されることも、良き因縁といえると思います。（本稿取材に当り、先生縁りの北清水伊藤良一氏、蓮沼村伊藤和夫氏の御協力を頂いたことを申し添えます。）

＝延命寺は何度か御紹介してありますので今回も案内図は省略させて頂きました。＝

文化財審議会委員

小沢春光氏寄稿